

季節

一年の計は元旦にあり

意味

一年間の計画は元日の朝に立てるべきだということ。

解説

3学期の始業式。ぴりりとした1月の朝の空気のなか、少し緊張した表情の子どもたちが並んでいます。

教室に戻ると、今年の目標を書いて発表するかもしれませんね。「今年こそは、マラソン大会で〇位になる」などと、はりきっている子どももいることでしょう。学年によっては、書きぞめで今年の目標を書くこともあります。

目標を達成するためには、努力が必要です。まず、年の初めにしっかりと目標を立てること。そして、それを一年間忘れずに、コツコツと努力することが大切です。

「元旦」は元日の朝のことだということも、教えておきたいものです。

季節

寒さ暑さも彼岸まで

意味

冬の寒さは春の彼岸まで、夏の暑さは秋の彼岸までで、その後はしのぎやすい気候になるということ。

解説

春の彼岸は春分の日、秋の彼岸は秋分の日のことをいいます。ちょうど、昼と夜の長さが同じになる日です。春分以後は昼間のほうが夜よりも長くなって、冬の寒さがやわらいでいきます。秋分以後は、夜のほうが昼間よりも長くなって、暑い日は少なくなっていきます。

長かった寒い季節、暑い季節も過ぎ去り、過ごしやすい季節がやってくることを、ありがたく思ったり、喜んだりするときに用いることわざです。「寒いなあ」「暑いよー」とつらそうな人に、「暑さ寒さも彼岸までだよ。もう少ししんぼうすれば、過ごしやすくなるよ」と、励ますときにも使います。

季節

棚から牡丹餅

意味

思いがけない幸運のたとえ。

解説

棚の牡丹餅が偶然落ちてきて、いい思いをした、ということ。「牡丹餅」とは、餅や米飯を小豆のあんで包んだもののことです。春のお彼岸に仏前に供えるものを「牡丹餅」、秋のお彼岸に作るものを「おはぎ」と呼び分けることもあるようです。牡丹は春、萩は秋の花ですね。

江戸時代、牡丹餅は酒とならぶ、嗜好品の代表的なものでした。ことわざとしては、「たなぼた」という短縮された言い回しもあり、現代日本語のなかでも、もっとも普及しているもののひとつともいえるでしょう。

ことわざの知名度は高いものの、こういうことがいつもあるわけがありません。やはり、日ごろの努力あってこそ、成果を得られると思っていたほうがよいにちがいません。



卒業式

一寸の光陰軽んずべからず

意味 少しでも時間を無駄に使ってはいけないということ。

解説

少年易老学難成	少年老い易く 学成り難し
一寸光陰不可軽	一寸の光陰 軽んずべからず
未覚池塘春草夢	今だ覚めず 池塘春草の夢
階前梧葉已秋声	階前の梧葉 已に秋声

この五言絶句「偶成」は、南宋の儒学者、朱熹の作とされてきました。が、室町期の日本の禅僧が、朱熹に仮託して作ったものといわれます。「光陰」とは、時間のことです。時間を無駄に使ってはいけないことはわかっていますが、それがなかなかできないのが人間です。時にはこの言葉を思い出して、反省することも大切かもしれません。

卒業していく子どもたちに、この言葉を贈って、一日一日を大切に過ごすことを望みたいものです。

学問は一生の宝

意味 学問は、長い人生の中で人の支えとなる大事なものだということ。

解説

お母さんやお父さんから「勉強しなさい」と言われて、「どうして?」と思った、という経験は、多くの子どもが共有するものではないでしょうか。遊びにいきたいのに、目の前の宿題をやるのが、なんの役に立つのでしょうか。

学問をするということは、人間の底力を育てるということです。生きていくうえでは、楽しいことばかりではありません。つらいこと、苦しいこと、多くの困難が待ちかまえています。そんなときに、学問によって、さまざまな考えかたを身につけていると、目の前の課題を解決する方法が、ぐんと広がります。困難に直面したときに、それを乗り越える力をやしなってくれるのが、学問なのです。

自分が興味をもったことを、学び続けることは、素晴らしいことです。

卒業式

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥

意味 知らないことを人に聞くのはその時は恥ずかしいものだが、聞かずに知らないままでいれば、一生恥ずかしい思いをするということ。

解説

平安時代の武士、源義家は、若いころ、能力はあるものの戦いの理論を知らないと思われていました。しかし、義家はその後、貴族で学者である大江匡房に傾倒し、学問に励むようになります。そして、後三年の役(1083 - 1087年)のとき、中国の兵書『孫子』から得た知識によって、飛ぶ雁の列の乱れから伏兵を知り、危機を乗り越えたといえます。

この場面の様子は『後三年合戦絵巻』に描かれ、いろはカルタの「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」として使われています。

子どもたちは、これから先の人生で、さまざまな困難に直面することでしょう。それを乗り越えていくためには、恥ずかしがらずになんでも人に聞き、学ぶことが大事だということを、伝えられることわざです。

